

書評作成を通じた能動的学習

大阪商業大学初年次教育科目「基礎演習Ⅰ」における
「おすすめの一冊」プログラム
2011～2013年

橋 本 信 子

はじめに

1. 「おすすめの一冊」プログラムの概要と授業運営
 - (1) 「基礎演習Ⅰ」における「おすすめの一冊」プログラムの位置づけ
 - (2) 「おすすめの一冊」にこだわる
 - (3) 口頭発表の進め方と効果
 - (4) 「おすすめの一冊」プログラムの反応
2. 「おすすめの一冊」を読む
 - (1) 「おすすめの一冊」の特徴
 - (2) 「おすすめの一冊読破プロジェクト」
 - (3) 「おすすめの一冊」を読書指導につなげる試み
3. まとめと展望

はじめに

本稿では、2011年度から2013年度の3年に渡り、大阪商業大学の初年次教育科目「基礎演習Ⅰ」第5～8週に実施している「おすすめの一冊」プログラムを通して得られた知見と成果、今後の課題を報告する。「おすすめの一冊」プログラムは学生自身が選んだお気に入りの本について発表し、書評を書くというものである。

以下、第1節では、「おすすめの一冊」プログラムの概要と授業運営、その効果と学生の反応について述べる。第2節では、学生が取り上げた「おすすめの一冊」の集計から読みとれる本学初年次生の選書傾向と特徴をまとめる。また、図書館および課外学習支援のための「サポート学習講座」へのデータ提供による読書推進のための連携を紹介する。最後に、今後の読書啓蒙の取り組みについて考える。

1. 「おすすめの一冊」プログラムの概要と授業運営

(1) 「基礎演習Ⅰ」における「おすすめの一冊」プログラムの位置づけ

「基礎演習Ⅰ」は大阪商業大学が全学共通で行う前期15回、2単位の初年次必修科目である。2011～2013年度の一年生は約1100～1200名で、26クラスに編成した。1クラスの人数は35～50名前後と学科により多少異なる。

「基礎演習Ⅰ」は初年次教育、専門基礎教育に加えて、就業力育成、キャリア教育、自校教育を行う科目と位置づけられている。授業内容は2011年度に一新された。このうちアカデミックスキルズを集中的に学ぶ5、6月の8回は、共通のテキストと指導のてびき、全クラス必須課題のワークシートを筆者が作成し、おおまかな評価基準を設けて、ほぼ同じ進捗で授業を進めている。

本稿で取り上げる「おすすめの一冊」プログラムはこのうち前半4回に行う。内容は次のとおりである。①「大学での学び方」を説いた短文を読んで要点をつかむ。②本の読み方、書誌情報の書き方を学ぶ。本のつくり(表紙、目次、奥付など)を確認したあと、章立てや段落構成、接続詞に注目するといった文章の読み方を復習する。③教員が作成した「おすすめの一冊」書評を例にして、序論・本論・結論からなる文章構成を学ぶ。④文章作成上の基礎的な心得を確認する。⑤発表台本または草稿作成、⑥口頭発表、⑦完成稿の提出である。①～⑦の順番と時間配分はクラスごとにアレンジしている。各担当者の判断が必要に応じてオプションのワークシートなどを組み入れている。そうした工夫や学生の反応、授業の進捗状況については、担当者間で情報を共有し、各自の授業に反映している。

(2) 「おすすめの一冊」にこだわる

このプログラムで取り上げる本は学生自身の「おすすめ」本にこだわっている。課題図書は設けていない。図書館の所蔵の有無も問わない。活字で出版されているものならジャンルも問わない。大学生・一般向けの読書術を指南する書籍やアカデミックスキルズの教科書においては、評価の定まった文学作品や哲学の古典に親しむこと、教員が指定する本や専門的な本を批判的に読むこと、多くの本を読むことを説くものが多い。そういった読書指導はもちろん大切である。しかし、本学の新生生の多くは読書の習慣が充分についているとはいいがたく¹⁾、アカデミックな文章になじみがない。そのため、まずは専門知識を必要としない題材で課題に取り組むことをねらいとしている。そこで文章作成や発表の楽しさを感じ、自信を得た学生は、その後の学習姿勢が積極的になるからである²⁾。実際、種々のライティング課題を比較したところ、学生が「面白い」と思う題材を扱ったときには明らかに取り組みの態度と成果物に良い効果が見られるのである³⁾。それが「おすすめ」にこだわる一番の理

1) 2011年度4月に新入生全員に行った調査によれば、「1ヶ月に何冊くらい本を読みますか(マンガ、雑誌、教科書を除く)」という問いに対して「0冊」と答えた学生が52.3%、「1～2冊」が37.9%であった。

2) なお、専門的な資料を批判的に読むプログラムは第9～12週の4回で行う。ここでは筆者が選定した新聞記事を素材に、問いを立て、関連する資料を探し、関連事項を調べてグループでまとめて発表する。この学習は、1年次後期の「基礎演習Ⅱ」、2年次以降の演習科目、専門科目や教養科目(本学では「副専攻科目」と呼ぶ)での輪読やブックレポート作成、レポート作成の準備作業と位置づけている。

由である。

ただし、自分が好きな本なら何でもよいわけではない。また好きではないが読んだことがある本の内容を紹介すればよいというわけでもない。「他人にすすめられる」本を説得力をもって批評するということは、学生が自らを表現することになるので、教育上認めがたい作品を学生が取り上げることはない。

課題図書や図書館所蔵本に限定せず、学生自身に本を選ばせて用意させるのには、図書館に学生のおすすめの作品が必ずしも所蔵されているとは限らないこと、あったとしても冊数が確保できないかもしれないという現実的な理由もある。このプログラムは入学直後の1年生1000人余りが一斉に取り組む。学生の取り上げる作品はかなり分散する傾向があるが、それでもやはり旬の話題作が多い（第2節で詳述）。これを本学の図書館だけでまかなうことは無理である。

時間的な問題もある。一冊の本を読了して書評や口頭発表に仕上げるには、ある程度の日数が必要である。読書に不慣れな学生でも余裕を持って取り組めるようにする必要がある。入学以前に読んで印象に残った作品や、先生・友人に勧められて面白かった本などを読み返すのであれば負担も少ない。

なお2011年度は映画も対象としたが、映画には活字にない要素が多く含まれているため書評とは別の指導が必要となることから、2012年度からは書籍に限定している。どうしてもおすすめの本が浮かばない、取り上げようと思った本ではうまく書評が書けなくて間に合わないという学生には、これまでに読んだ漫画でもよいとしているが、漫画は年々減っている⁴⁾。

(3) 口頭発表の進め方と効果

2011年度は1分という長さを意識して発表することを重視し、書評の分量を400～600字程度とした。しかしそれでは不足を感じたので、2012年は600字前後、2013年度は800字程度とした。この3パターンでは800字程度が最も良い書評が書けると感じた。

「基礎演習Ⅰ」は1クラスの数に幅があり、雰囲気もずいぶん違うので、口頭発表は担当者が最適と判断する形で行っている。

筆者のクラスでは、まず5～6人の小グループに分かれて互いに発表し、その後グループの代表1～2名がクラス全体に発表する方式を採っている。代表は自薦他薦を問わない。

この形をとる理由の一つは時間的な問題である。600～800字の原稿を読みあげると、それだけで1人2分ほどかかる。入れ替わりや評価の記入の時間なども必要なので、1回90分の授業で全員が発表することは難しい。しかし発表だけに2回の授業を割くのは日程的に厳しい。また筆者は、授業にメリハリをつけ、集中を保たせるため、90分の授業を3部構成で組み立てるようにしている。この発表の回も、①全体説明⁵⁾、②グループ内発表、③代表の発表の3部に分けて行っている。

3) 学生が意欲を持って書こうとする・書ける課題については、橋本(2012)を参照されたい。

4) 筆者自身は、漫画は研究対象となる優れた表現方法であると評価しているが、このプログラムでは専門書を手取る導入として文字主体の書籍に誘導している。しかし漫画を取り上げた書評が劣っているということはない。むしろ作品の良さを伝えたいという意欲にあふれた優れた文章が多いことは付け加えておきたい。彼らの熱い「おすすめ」によって、筆者は尾田栄一郎『ONE PIECE』を読むきっかけをもらい、2012年夏に刊行された67巻までを読んだ。

2つ目の理由としては、極度に緊張する学生の心理的なハードルを下げたいからである。この方法だと教員は全員の発表を聴くことはできないが、学生にとっては緊張の度合いが多少は減る。それでも発表の様子や学生の感想を見ると相当緊張している。我々教員でもあらたまって何かを発表するときは少人数の前でも緊張するものである。

3つ目の理由としては、早い時期にクラスづくりをしたいからである。発表やグループワークの回以外は、名前と顔の把握、私語の抑制のために名簿順に着席させているが、それでは学生は限られた人しか交流しようとしなない。そこで、普通の授業態度も考慮したうえで、できるだけ席を接していない学生と交流できるようにグループをつくっている。

他人の発表を聴くときはプレゼンテーション評価シート⁶⁾に気がついたことなどを記入する。ここではチェック項目に○×を記入するだけでなく、自由記述欄にコメントを必ず書くよう指示している。それも「良かった」などといった一言ではなく、どういう点でどうであったのか、それが自分にどう生かせそうかを文で書くことが大切であると説いている。ほとんどの学生は指示を守って真摯なコメントを書く。コメントからは、学生が同輩の発表から大いに刺激を受けていることが伺える。また、ほめるばかりでもない。同輩の発表への鋭い指摘や分析も多々見られる。筆者が直接聴くことのできなかつた学生の発表の様子もかなりのところ伝わるのである。また評価シートの記述により、人の発表をきちんと聴いていたかを確認することができる。

グループの代表としてクラス全体に発表する学生は、「緊張した」と一様に感想を書いてくれるが、しかしグループ発表を経ているので、代表として発表するときには立派なプレゼンテーションの手本を示してくれる。代表になったことは学生の大きな自信になる。彼らはその後のグループワークでもメンバーをリードする傾向が顕著である⁷⁾。また、その回に準備不足で発表できなかった学生も、彼らが見本を示してくれるので次の回にはスムーズに発表できるという効果もある。

(4) 「おすすめの一冊」プログラムの反応

このプログラムに対する学生と担当教員の反応は上々である。学生は読む、書く、聴く、発表するという基本的なアカデミックスキルズに楽しみながら取り組むことができている。特に他の学生の発表を聴くことは良い刺激となるようで、自分の意見を発表することに抵抗がある学生からも良い反応を得ている。学生同士が交流を広げる機会にもなっている。作品

5) 発表の前には、橋詰加奈教諭(現・滋賀大学教育学部附属小学校)にご教示いただいた「話し方名人・聞き名人」を紹介している。話し方名人のコツは「あいてを見て、いっしょうけんめい、うつむかないで、えがおで、おおきな声で発表する」、聞き方名人のコツは「あいてを見て、いっしょうけんめい、うなずきながら、えがおで、おわりまで聞く」である。初出は確定できていないが小学校ではよく使われているとのことである。

6) プレゼンテーション評価シートは、学習技術研究会編(2006)を参考に作成した。

7) そのほかの工夫として、優れた課題を提出した学生には「ごほうび」の「よくできました」シールを貼るなどしている。シールやハンコは笑いを誘い、喜ばれる。なかには修正する必要がないほど完成された草稿を提出する学生もいる。彼らに2, 3の字句修正のために同じ文章を再提出させるのは意味がないので、2013年は、もう1本書評を書くことを提案してみた。任意としたが、3名中1名が即日、1名が翌週に提出した。その出来も非常に優れたものであった。この2名は授業終了時、「文章を書くことに苦手意識があったが、認められたことで少し自信がついた」と感想を書いた。本学新入生には、力がありながら自己評価が低い学生が散見される。こうした学生は意識して褒め、自信をつけさせることが大切であろう。

のファン同士で友だちになったと報告してくれた学生もいた。教員もいまどきの学生の好む作家や作品を知ることができる楽しいプログラムである。学生の声の一部を紹介する（原文ママ）。

「大好きな本をみんなに紹介できて良かった」「他の人の発表を聞いて自分に足りないものを改めて知ることができてよかった」「書くことが苦手で大変だったけど完成した時の達成感がとても良い気分だった」「いつもはマンガしか読まないの、小説を読めたことはとてもよかったです。これからもどんどん読んでいきたいです」「自分の好きな本を、相手に伝わるように一生懸命考えて発表した。でも、他のみんなもしっかりと自分の考えなどを持っていてすごいわかりやすい説明をしてくれる人がいて自分はまだまだだと思いました」「このプログラムを通して、文から読み取る方法・まとめ・本を読んでそれを他の人に分かりやすく伝える難しさなど勉強できた」（基礎演習Ⅰで）一番印象に残っているのは書評です。人によっていろいろ考え方があるんだと思った。発表した中で読みたい本もあったし、今度借りて読んでみようと思う」「本にはたくさんの良い情報が書かれているので、本をよむことの大切さをみんなにわかってもらえるような授業で良いと思った」

提出物には必ずフィードバックをすることを全クラスで徹底している。教員の負担は大きい、学生との信頼関係をつくるには絶大な効果がある。筆者は早いうちから学生の名前を呼びながら一人ひとりに声をかける機会を作っている。個別に言葉を交わすと、学生は驚くくらい生き生きと話してくれる。そうしておくとも真っ赤に添削した草稿を返却しても必要以上にショックを受けない。納得して推敲するので、完成稿は著しく良いものになる。すると完成稿を返却する際にはおおいに褒めることができる。これは後半の授業を進める上で明らかに良い効果を生んでいる。

2. 「おすすめの一冊」を読む

本節では「おすすめの一冊」を集計して見えてきた学生の選書の特徴と、それらを筆者が読むことで得られた教育効果について述べる。

(1) 「おすすめの一冊」の特徴

2012～13年度は担当教員の協力で全クラスの「おすすめの一冊」を集計することができた。そこから学生が選んだ本の傾向を紹介しよう。

2012年は875名（1078名中）から514作品が「おすすめの一冊」に挙がった。2013年は818名（1079名中）543作品である。意外に分散するという印象である。最も人気があった作品でも2012年度で26名、2013年度は20名である⁸⁾。3クラス120～150名ほどを担当しても同じ作品を取り上げる学生は多くて3名程度である。

人気上位に並ぶ作家には、ここ3年間大きな変動はない。作家別では山田悠介、東野圭吾

8) 2012年度の人気1位は、岩崎夏海『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』と長谷部誠の『心を整える。』の2作、2013年度は長谷部の同書であった。

が人気である。この2作家は取り上げられる作品数も多い。また、両作家の作品を読んだ学生の書評には、同じ作家の作品を何冊か読んだことがあるという記述がよく見られる。つまり、リストに挙がっている以上に愛読されているといえよう。筆者が2011年度に担当したクラスで東野を取り上げた学生たちは、友人と同じ作品にならないようにしたと話していた。彼らが授業後に東野作品について熱く語り合う場面もあった⁹⁾。ほかには有川浩、あさのあつこ、伊坂幸太郎なども毎年複数の作品が挙がる。

映像化された作品の原作本も人気がある。J.K.ローリングの「ハリー・ポッター」シリーズは個別の巻を紹介する学生もいればシリーズ全体をすすめる学生もいる。百田尚樹『永遠の0(ゼロ)』は文庫版で500ページを越えるが、2013年に7人が取り上げた。興味深いことに、そうした映像化作品の原作を読んだ学生の大半は「原作の方が良い」と評している。その逆は稀である。映像作品と原作、それぞれの良さがあるのでどちらも見てほしいという記述もある。このようにドラマや映画、アニメーションを見たことがきっかけで原作も読んでみるというのは昨今の読書の一つのパターンといえよう。それをきっかけに読書の面白さを知り、ほかの作品にも手を伸ばすようになることを期待したい。

商業大学らしさが現れているのは、岩崎夏海『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』が3年連続で人気を保っていることだろう。同作品は図書館でも常に貸出しランキング上位を維持している。

スポーツ関係の書籍も人気である。2大人気スポーツは野球、サッカーである。なかでもサッカー日本代表チームのキャプテン、長谷部誠の『心を整える。』は2年連続人気1位であった。在阪プロ野球球団に所属した選手や監督の作品が挙がるのは大阪の大学らしさだろうか。また選手本人の著作ではないが、イチロー選手の語録からスポーツマインドを説いた本なども人気がある。そのほかの競技ではバスケットボール漫画である井上雄彦『スラムダンク』とその関連本も人気である。スポーツトレーナー、スポーツ心理学の本も毎年登場している。

夏目漱石、芥川龍之介、森鷗外、太宰治らの文学作品も毎年少なからず登場する。2013年には4月に刊行されたばかりの村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の旅の年』を取り上げた学生が5名いた。

学生が「おすすめ」の本を手にとったきっかけには、「映像作品を見た」「友人や家族、先生に勧められた」「スポーツや音楽など自分が打ち込んできたことを扱った内容だから」「書店で普段と違うジャンルのものを探して」「書店または図書館でたまたま手にとって」「表紙の装丁にひかれて」といったものが挙がる。

このうち周囲の親しい人に勧められたからという理由に注目したい。先に紹介した感想にもあるように、学生は自分のお気に入りを読んでほしいと思うと同時に、クラスメイトのすすめる本に興味を抱く。図書館でも学生選書スタッフのおすすめ本コーナーが一番人気だという。そうすると、学生に読書を促す際の仕掛けとしては、身近な人が推薦するというのがもっとも有効ではないか。そこで、本節3項では、そういった仕掛けについて紹介する。

9) 余談であるが、東野は本学の所在地である東大阪出身の作家で、東大阪を舞台にした作品もある。しかし学生は特にそれで選んでいるわけではなさそうである。

(2) 「おすすめの一冊読破プロジェクト」

教員は、未読の作品でも発表や書評作成の指導はできる。しかし、せっかく学生が懸命にすすめてくれた本なのだから読んでみようと思ひ立ち、2012年夏から「おすすめの一冊読破プロジェクト」と一銘打って、学年の人気作品と担当クラスの学生が紹介した本を中心に読み進めている¹⁰⁾。読んだ作品の傾向を紹介しよう。

「おすすめ」本には一文が短く、軽い文体のものが多い。あまり言葉にこだわっていない文章も多い。例えば山田悠介や金沢伸明は学生に絶大な人気を誇るが、文章は練れているとはいえないし、「つつこみどころ」が満載である。しかし、展開の速さ、行間を読む必要のない直接的な文体、同じフレーズの多用によるスピード感がある。学生の書評にも「普段本を読まない人でも一気に読める」という記述が多かった。若者に支持される理由は、この勢いの良さにあると見ている。

情景が映像のように浮かんでくる作品も多い。なかでもアニメーションやドラマの脚本家、演出家がノベライズしたものは、読みながら映像を見ている感覚さえ生じる。映像作品も鑑賞して、想像したとおりか確認するのも面白そうである。

スポーツ選手や監督の著作は、生活習慣の工夫、努力と研究と実践の実体験、職業人としての心構えを読みやすく説いているので、その著者のファンでなくても、その競技に関わっていなくても参考になる。興味深いことに、このジャンルの書評は、読み手によって印象に残った部分が分かれる傾向がある。例えば長谷部誠の『心を整える。』を読んだ学生には、参考になった部分を具体的に引用しよう指導しているが、引用が重なることがない。同じ本でも読み手によって受け取るメッセージはそれぞれに違い、そこに読み手の個性が反映されることがわかる。

こうして集中的に「おすすめの一冊」を読んでもみると、今後挙がってきそうな本を予想できるようになった。先述したとおり、映像化された作品、ベストセラー作品、人気作家の新作、前年に活躍したスポーツ選手の著作などである。例えば沖方丁『天地明察』は2012年にはリストに挙がらなかったが、同年秋に映画化されたので、先んじて読んで映画も鑑賞しておいた。文庫本で上下巻に分かれている長編小説で、時代やテーマも若者にはなじみがないと思われたが、予想は当たり2013年に取り上げる学生が現れた。

では、このように教員が学生の「おすすめ」を読むことは学生にとってどのような意味があるのか。教育にどう活かすことができるだろうか。

(3) 「おすすめの一冊」を読書指導につなげる試み

筆者は2012年の夏休みから「おすすめ」本を読み進め、夏休み明けに人気上位本と担当クラスの学生が取り上げた本のリストをまとめ、読了したものにはチェックを入れて「基礎演

10) 結論から言えば、この試みはたいへん面白い。学生がどんな本を好むのかを知ることができるだけでなく、この取り組みを自分に課さなければ手に取ることはなかった作家、作品、ジャンルの本に触れるきっかけをもらえるからである。さすがに「おすすめ」なだけあって大きな「ハズレ」はない。特に映像化された作品はドラマティックで退屈しないものが多い。深夜まで読みふけてしまうこともしばしばである。2013年9月末までに筆者が新規に読んだ「おすすめの一冊」は90タイトル、漫画1タイトル(67巻)である。ほとんどは本学図書館と居住地の公立図書館で揃えることができたが、授業で観察した限りでは、学生は自身で新たに購入するか、もともと持っていた本を使っていることが多いようである。

習Ⅱ」の授業で配布した。さらに「おすすめ」を読んだことを個別に話しかけたところ、みな「面白かったですよ」と目を輝かせ、ひとしきり話に花が咲いた。その後も毎週配布するレジュメに「今週の記録 ～先生編～」と題したコーナーを設けて、読了した「おすすめ」本を載せた¹¹⁾。

このような発信が、即、担当学生の読書量を飛躍的に増やすわけではない。しかし学生は自分が紹介した本に興味を持ってもらうことを明らかに喜ぶ。課題を提出させただけで終わらず、その後の関係性を深める手立てに活用したことで教員への信頼関係が強まり、授業への意欲を向上させる効果があったと感じた。「おすすめ」漫画の話で盛り上がり、何週にもわたって家から運んで貸してくれた学生、「先生のおすすめの本を教えてください」という学生も現れた。

おすすめ本を尋ねてきた学生には、その学生が提出した書評を参考に、彼が関心を持ちそうな別の著者の本を選んだ。見立ては当たったようで、彼は貸した本を読んだあと、同じ作者の別の作品を自発的に図書館で借りて読んでいた。学生の「おすすめの一冊」を読んだことで、学生が読みそう、読めそうな本を選ぶ手がかりを得られたのである。

このように「おすすめの一冊」リストは、単に「読んだことがある本」「面白かった本」のリストではなく、800名余りの新入生が「読み通して、書評を書いて、人にすすめた本」を知ることのできる貴重なデータである。これを活用しない手はない。

そこでまずは図書館にリストを提供したところ、2012年11～12月に「おすすめの一冊」コーナーが特設され、担当職員が学生の書評から抜粋したコメントも書籍の横に展示された。このコーナーの本の貸し出しは順調だったとのことである。2013年も読書週間に合わせて10月中旬から同様の展示が企画された。正規授業と図書館が連携して読書啓蒙の仕掛けを2年続けて企画運営することができたのである¹²⁾。

2013年度入学予定者向け入学前課題の一つ「読書のすすめ」の案内文書にも参考資料として「おすすめの一冊」集計結果を活用した。先輩のすすめる本の一覧があれば入学予定者が興味をもって案内を読むのではないかと期待したからである。その効果が、2013年度は学生の準備、取り組み姿勢、課題の出来が非常に良かった。実際、「読書のすすめ」を見て本を選んでおいたという声を複数の学生から聞くこともできた。

学修支援センター運営の「サポート学習講座」で発行している「楽習(がくしゅう)アワーだより」でも「おすすめの一冊特集」と題して人気の本を紹介し、図書館への誘導をはかった。しかし人気の本は貸し出し中のことが多いので、学修支援センターでも人気上位本を購入し、「楽習アワー文庫」として学生に公開している。2012年はあまり動きがなかったが、2013年度は貸し出しが微増している。文庫を見たり、借りに来たりした学生が講座担当教員と言葉を交わす機会も増えている。こちらは正規授業と課外講座との連携といえよう。

11) 学生には「学習記録カード」と名付けたA4両面のカードに毎週、生活や学習の記録を書くよう促していたので、同じことを自らに課してみた。「学習記録カード」については、橋本(2013)を参照。

12) なお、「基礎演習Ⅰ」では4月に図書館主導によるガイダンスの回を設けている。このときにも「おすすめの一冊」が決まっていなければ図書館で探すよう誘導している。

3. まとめと展望

以上見てきたように、「おすすめの一冊」プログラムでは一冊の本をていねいに読み通し、その良さを説得力をもって人に伝えるという経験をする。これは新入生にとって大きな自信になっている。学生間、学生と教員間の知的な交流を促進する機会にもなっている。もちろん多読の訓練にはならない。専門書の読解に即効力があるわけでもないだろう。この4回のプログラムで読書習慣がついたという明確な効果も特に出していない。しかし、本を読むようになった、もっと読みたいと思ったという感想を書く学生は毎年確実にいる¹³⁾。図書館の特設コーナーが好評だったり、「楽習アワー文庫」の利用が少しずつ増えていたりすることからも、このプログラムは学生の読書を推進するきっかけとして有効であると手応えを感じている。今後も関係各所との連携を継続し、読書を推進するさらなる仕掛けを展開していくことが、本学学生の知的好奇心を向上させ、学習意欲を高める手立ての一つになると考える。

参考文献

- AERA MOOK（2004）『勉強のやり方がわかる。』朝日新聞社
- 家入葉子（2009）『文科系ストレイシープの研究生活ガイド 心持ち編』ひつじ書房
- 板坂元（1973）『考える技術・書く技術』講談社
- 大場博幸（2010）「大学における読書教育：その必要性と目標・方法」常葉学園短期大学紀要（41）
- 学習技術研究会編（2006）『知へのステップ 改訂版』くろしお出版
- 齋藤孝（2012）『誰でも書ける最高の読書感想文』角川書店
- 佐藤優（2012）『読書の技法』東洋経済新報社
- 鈴木信一（2008）『800字を書く力』祥伝社
- 高木徹（2009）「読書指導の試み 現代教育学部における実践」中部大学教育研究 No.9
- 田中共子（2003）『図書館へ行こう』岩波書店
- 東郷雄二（2008）『打たれ強くなるための読書術』筑摩書房
- 成田康子（2012）『みんなでつくろう学校図書館』岩波書店
- 橋本信子（2012）「大阪商業大学初年次教育科目におけるライティング指導の実践」大阪商業大学論集 人文・自然・社会篇 8巻2号（通号166号）
- 橋本信子（2013）「能動的学習を促すための知的交流の場をつくる取り組み」大阪商業大学論集 人文・自然・社会編 9巻2号（通号170号）
- 林望（1996）『知性の磨きかた』PHP 研究所

13) 感想を一部抜粋して紹介する。「ぼくが選んだ本は高校の時に友達にすすめられておもしろそうと思った本だった。読んでみると本当に面白くてその著者の他の本も読んでみたくなった。だから次回本を発表する機会があれば、他の本を紹介していきたいと思う」「私は本の課題で少し人生が変わったと思いました。とても少しですが。まず私は今まで本が全く好きではなくて、本を読むことをとことん避けて生きてきました。（中略）しかしこの課題で本を読んで以来（中略）本屋に行く回数がとても多くなりました。ひまな時はほとんど本屋にいます。」

フェリス女学院大学附属図書館(2009)『いま、図書館に求められるもの フェリス女学院大学の
挑戦1 読書を通して学びを見つける』ひつじ書房

(謝辞)

本稿は大阪商業大学教育活動奨励助成費(助成期間平成24~25年度)を受けて行った教育活動の報告である。